

# 三階蔵に見る独立柱の役割に関する考察

久保 奈緒子

人間文化学研究科地域文化学専攻博士後期課程

## 1. はじめに

三階蔵とは文字通り3階建ての土蔵のことで、最も古い建築では江戸時代初期にまでさかのぼる。多層階住宅が奢侈禁止令の対象となっていたことから、一般的な平屋建てや2階建ての土蔵と比較して、三階蔵は「富の象徴」とされてきた。三階蔵は全国に散在し、個別の事例として報告されているものもある。しかし、全体の分布状況や傾向、特徴などはこれといって把握されておらず、未だ不明な点が多い。

三階蔵の中には独立した棟持ち柱を持つものがある。独立した棟持ち柱とは、地棟の直下に建ち地棟を支える、外周の柱からは独立している柱のことである。本稿では、これまで現地調査をおこなった三階蔵や、報告書等を基にし、特に「独立した棟持ち柱を持つ」三階蔵について考察をおこなう。なお、本稿ではこれ以降「独立した棟持ち柱」を指して「独立柱」と表す。

## 2. 三階蔵における独立柱に関する研究

### 2-1. 先行研究と拙稿に関して

独立柱を持つ土蔵について考察した平山育夫氏の論文<sup>1</sup>(以下、「平山論文」と記述する)では、国指定重要文化財となっている土蔵のうち、「梁行5.5m(3間)以上」で、尚且つ階数が増えるほど独立柱の使用率は上がるとしている。また同論文では、新潟県内の重要文化財となっている土蔵のうち、梁行3間以上で2階建ての土蔵はすべからず独立柱を持つ、ともしている。

拙稿<sup>2</sup>にて独立柱を持つ三階蔵に関して平山論文と比較考察をおこなったが、論拠に不十分な点があった。本稿では、新たに見つかった独立柱を持つ三階蔵の考察も含めて、改めて検証をおこなう。

### 2-2. 独立柱を持つ三階蔵

これまでに現地調査や資料収集をおこなった三階蔵のなかで、独立柱を持つものは5棟であった。これに加えて、新たに三階蔵の現地調査を行った白山市白峰地区でも、独立柱を持つ三階蔵が現存した。ここでは、白峰地区における三階蔵について考察す

るとともに、独立柱を持つ三階蔵についても詳述する。

## 3. 白峰地区について

石川県白山市白峰地区は、集落全体に非常に多くの多層階養蚕農家住宅が残る。当該地区は、福井、石川、富山、岐阜の4県にまたがる白山の麓にある。手取川と大道谷(おおみちだに)川に挟まれた段丘上に所在し、すぐそばまで険しい山が迫る。こうした地形から、白峰地区には耕作地がほとんどない。

現在の白峰地区一帯は明治の初めごろまで「牛首村」と呼ばれ、経済の中心地となっていた。主な産業は農業、養蚕業、林業およびそれらの加工品生産で、集落内での日用品販売を行う商家もあった。この地域で生産される紬は地域の名前から「牛首紬」と呼ばれ、16世紀中頃には生産が始まっていたとされる。

京都や金沢といった絹織物の需要が高い地域を要する近畿・北陸地方では、養蚕に力を入れていた集落が多くみられ、それに伴い住居も巨大化した例が数多くある。白峰地区はまさに養蚕で栄えた地域であり、現在でもその名残として多数の多層階建築が残っている。

### 3-1. 白峰地区に現存する三階蔵

白峰地区には5棟の三階蔵がある。多層階化された主屋は非常に多く見られている一方で、土蔵の多層階化は主屋のそれほどではない。同じ付属屋でも、作業空間として養蚕に使用していたという納屋などとは異なり、土蔵はあくまで収納空間として利用されていたことが要因であろう。とはいえ、同一地区内に5棟もの三階蔵が現存する例は他の地域にはなく、特徴的である。詳細と図面に関しては、現地調査および当該地域に関する調査報告書<sup>3</sup>を基に、その特徴について考察をおこなう。

#### 3-1-1. 久司敏麿家

久司家は、主に耕作や木材の伐採、麻布などの生産を行っていた。当家は明治13(1880)年に大火で家を失ったため、家屋は既存建築を購入したもので



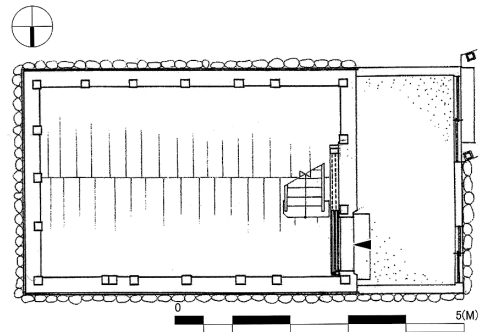
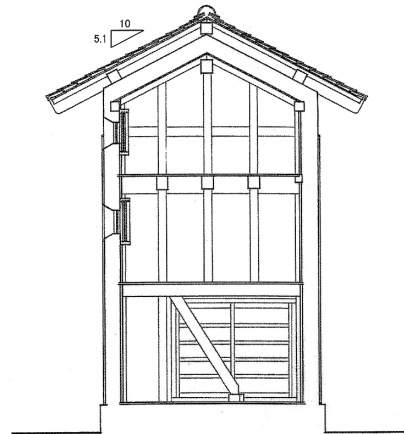
写真1 久司家住宅三階蔵

ある。主屋は2階建てだが、増築の際に棟が移動したことで棟高が変わり、小屋裏の空間が当初より広く、高くなっている。その小屋裏には、養蚕を行っていた際に蚕棚を取り付けていた貫の痕が束に残っている。

三階蔵を1棟所有しており、桁行約5.1m(3間)、梁行約3.2m(2間)、棟高(本稿では地面から礎斗積み上部までとする)約8.8mである。棟方向は東西におき、屋根は置き屋根、入口は妻入りとなっている。当初は平入りであったが、約50年前に主屋との接続を考え土蔵の入口が変更された。現在の入口には下屋があり、主屋からは廊下でつながっている。蔵内側の壁板には時計回りに番付が記されており、床板には和釘が使用されている。なお壁板は横向きに配されている。入り口は引き戸のみで、観音開きの扉はない。入り口変更の際の影響か、1階から2階への階段は現状では入ってすぐ右手にある。2階から3階への階段は、写真から、窓の前に平壁と平行に取り付けられていることがわかる。窓は2階、3階のそれぞれ南側平面、階段の横に位置をずらして各階1つずつ設けられている。

白峰地区に関する報告書<sup>4</sup>の久司家の三階蔵断面図によると、地棟は一見、棟持ち柱が支えるように見えるが、同ページ右隣の小屋組みの辺りを映した写真では、妻面の柱は梁で止まり、位置を少しずらして登り梁まで伸びている。妻面ごとに異なる小屋組み構造を持つとは考えにくい。そのため、妻面では3階部分の柱は一旦この梁で止まり、梁から伸びる柱が登り梁と地棟それぞれを支えていると考えられる。

登り梁は側柱上に架けられた桁が支える京呂組で

図1 久司家住宅三階蔵平面図<sup>5</sup>図2 久司家住宅三階蔵断面図<sup>4</sup>

ある。蔵の規模や特徴から、この空間では養蚕は行っていなかったと考えられる。

### 3-1-2. 山岸十郎右衛門家住宅

材木の卸売りや生糸の卸売りなどを主な生業としていた山岸家は、加賀往来(旧幹線道路)沿いに大きな敷地を所有し、3階建ての主屋と3棟の三階蔵を持つ。

主屋は切妻造り妻入り、桁行9間半、梁行6間の3階建てに加えて小屋裏空間を持つ。2階から屋根下までは土壁になっており、登り梁は、柱が直接受ける折置組で組まれている。主な居住空間は1階で、2階および3階は床板の一部が簀の子になっているなど、養蚕のための空間であったと考えられる。

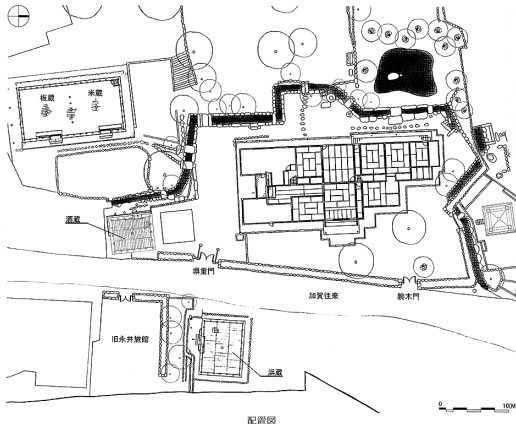


図3 山岸家家屋配置図<sup>6</sup>

山岸家には3棟の三階蔵の他に、養蚕を行っていた3階建ての大納屋があったとされるが、現在は土台のみを残して建物は現存しない。

#### ①米蔵・板蔵

3棟の三階蔵のうち、最も規模が大きい蔵である。切妻造り平入りで2つの入口を持ち、桁行約14.9m(8間)、梁行約7.3m(4間)、棟高約10m、地棟は南北におく。屋根は置き屋根で、3本の独立した棟持ち柱(以降「独立柱」と記述する)が建てられている。現状では内部を仕切る壁は無いが、独立柱に残る貫の痕跡から、元は中央の独立柱を境に、桁行の北側半分が米蔵、南側半分が板蔵であったと推測されている。なお、2階および3階には貫などの痕跡がないことから、当初より仕切りは無く1つの空間として使用されていたと推測される。

1階の板蔵には、明治4年に八右衛門と茂八という大工が床板を敷き直す施工を行ったことを記す墨書があるほか、鍵の板札に弘化2(1845)年の文字があり、この頃の建築の可能性があるという。なお、大工の名前に関してはこの集落にある八坂神社の棟札に加藤八右衛門と、水上茂八の名前があり、年代が近接していることから、それぞれ同一人物の可能性も考えられる。

写真から2階の床面は、中央の3本の独立柱に架けられた梁の上に、桁行方向に桁が載り、桁と平行に中引梁がかかり、その上に根太が梁行き方向に架けられている。独立柱のある蔵では、中引き梁や根太を使用して床を支える構造をとっているケースも



写真2 山岸家住宅米蔵・板蔵

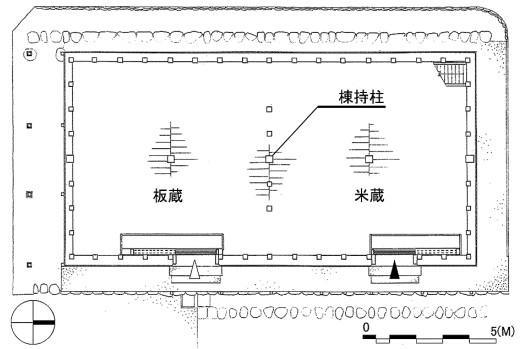


図4 山岸家住宅米蔵・板蔵平面図<sup>7</sup>

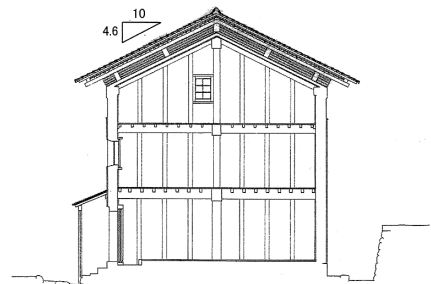


図5 山岸家住宅米蔵・板蔵断面図<sup>7</sup>

確認されており、この蔵でも例に漏れず、同じ手法が用いられている。

## ②酒蔵(味噌蔵)

切妻造り平入り、桁行約5.2m(3間)、梁行約4.2m(2間)、棟高約8.6m、地棟は南北に置く。中央部に1本の独立柱を持つ。屋根は置き屋根で、図面によれば妻面の柱は1階からの通し柱となっており、妻面の5本の側柱がそれぞれ登り梁と地棟を直接支える構造となっている。梁を用いずに直接、屋根構造を支える方法は、筆者の修士論文<sup>8</sup>で取り上げた三階蔵の中で比較的規模の小さい三階蔵に見られる特徴である。

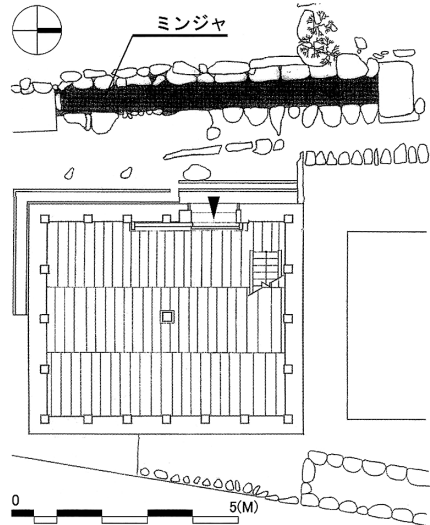
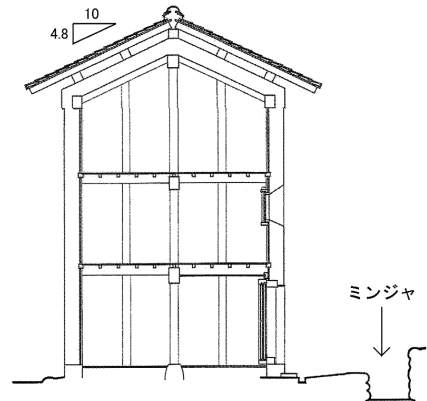
中央の独立柱に対しては、2階および3階の床組構造として、桁行方向に中引き梁を架け、その上に根太をかけ、床板を載せている。この点は米蔵・板蔵のそれと同じ手法である。

階段配置は、1階から2階への階段が入口すぐ左手、妻壁と平行に西から東へ向かって上るよう配置されている。2階から3階への階段は断面図に表れておらず、また平面図もないため詳細は不明だが、少なくとも桁行中央部より北側の位置に配置されていると推測される。

1階にある墨書には、明治9(1876)年に壁の塗り替えを行ったこと、妻壁の破風板を替えたことが記されていることから、建築年代はこれ以前にさかのぼると考えられる。米蔵・板蔵の墨書に名前があった八右衛門と茂八の名が、ここでも確認されている。



写真3 山岸家住宅酒蔵(味噌蔵)

図6 山岸家住宅酒蔵(味噌蔵)平面図<sup>9</sup>図7 山岸家住宅酒蔵(味噌蔵)断面図<sup>9</sup>

## ③浜蔵

浜蔵の語源は、牛首川に面した急斜面の呼び名「浜」に由来するという。当家では宝蔵とも呼ばれていたようで、儀礼用の道具類や文書の保管に用いられていた。土台には湿気をはじく性質をもつ赤石砂岩が使用されており、川が近いことによる湿気の流入に配慮したと考えられる。

切妻造り平入り、桁行約9.5m(4間)、梁行約7.4m(3間)、棟高約11m、地棟は東西方向に置く。図面によれば、妻面の柱は1階からの通し柱となっ



写真4 山岸家住宅浜蔵

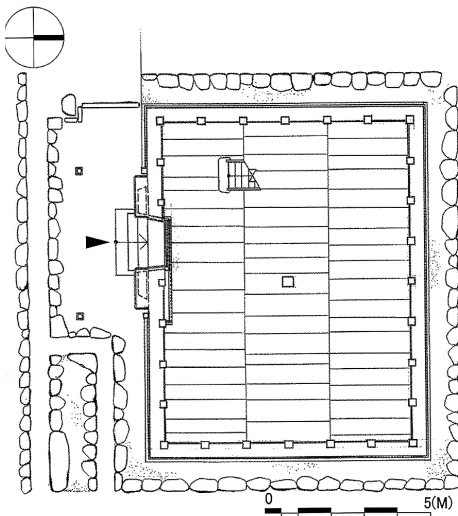


図8 山岸家住宅浜蔵平面図<sup>10</sup>

ており、妻面の7本の側柱がそれぞれ登り梁と地棟を直接支える構造となっている。中央の独立柱に対しては、2階および3階の床組構造として、梁行方向に大引きを架け、その上に根太をかけ、床板を載せている。屋根構造、床組の特徴、どちらも先の2棟の三階蔵と一致する。

階段配置は、1階から2階への階段が入口すぐ左

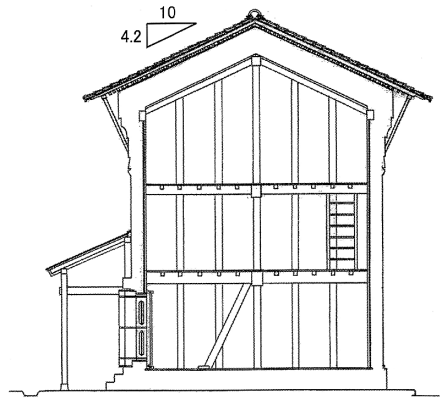


図9 山岸家住宅浜蔵断面図<sup>10</sup>

手、妻壁と平行に南から北へ向かって上よう配置されている。2階から3階への階段は、桁行中央部より東側の位置に北側の平壁と平行に西から東へ上よう配置されている。

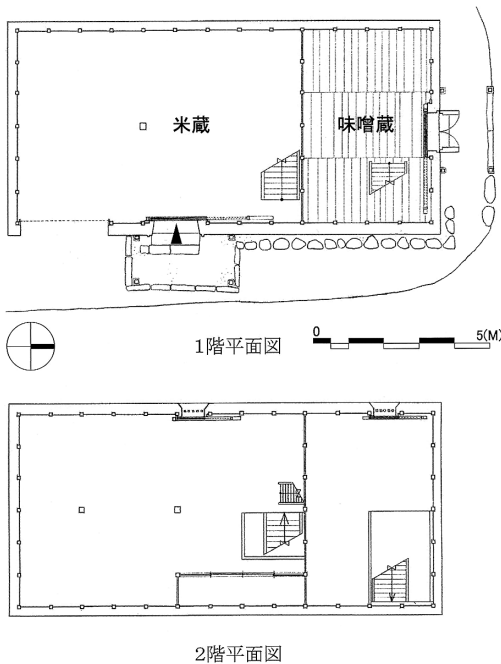
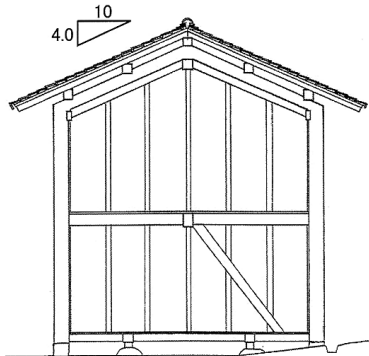
唯一、屋根の構造のみ異なる。他の2棟と違い、置き屋根ではなく「ツカセ」と呼ばれる、壁から伸ばした斜材で補強しながら支える構造をとっており、厚みが薄い。外壁の板壁は2階の天井部分までとなっている。鍵の板札より、慶応2(1866)年頃の建築と考えられている。

### 3-1-3. 松原酒店

松原酒店にある三階蔵は、桁行約11.7m(6間半)、梁行約5.3m(3間)、棟高約7.6mの土蔵で、この集落に現存する蔵の中では山岸家の米蔵・板蔵に次いで大きな蔵である。元は旅館が所有する蔵であった。

屋根は置き屋根で、入り口は2箇所あり、1つは北側の妻壁に、もう1つは東側の平壁にある。内部は北寄りに桁行2間(約3.6m)のところで区切られており、北側が味噌蔵、南側が米蔵となっている。味噌蔵は3階建てで、米蔵は2階建て。味噌蔵の3階部分へは米蔵の2階から上がるという、いわゆる「ロフト」のような構造になっている。このような形で土蔵内部を仕切っている例は、三階蔵の調査では他に例がなく、非常に興味深い。

米蔵にはかつて、年貢米を保管していたという、1階中央には独立した柱が建っているが、棟持ち柱ではなく、2階床部分で途切れている。2階では1

図10 松原酒店土蔵平面図<sup>11)</sup>図11 松原酒店土蔵断面図<sup>11)</sup>

階の独立柱と桁行方向で異なる位置に、2本の独立柱が建てられている。1階の独立柱には仕切り板がはめられていたと見られる痕跡が残っているようだが、2階の独立柱については詳細不明である。

また断面図は米蔵側のみで、3階建てになっている味噌蔵の図がないため、3階部分についても詳細不明である。米蔵の構造に関して言えば、小屋組みは側柱が直接、登り梁や地棟を支えている。2階の

床組に関しては、平面中央に独立した柱はあるものの、中引き梁や根太は用いられていない。これは、この独立した柱が、構造材として地棟を支える棟持ち柱ではないことが理由ではないかと推測される。

### 3-2. 白峰地区の三階蔵に関する考察

白峰地区は主屋こそ多層階化するが、土蔵は養蚕を目的とした多層階化はしなかったようである。蔵ではなく納屋が作業空間として多層階化することはあったようだが、土蔵にはあくまで、米や木材、家財道具の保管場所としての特性が認められるばかりであった。

主屋の多層階化は目立つものの土蔵まで3階にしている例はそれほど多くない。この傾向と現存する当該地区の三階蔵から考えられることは、付属屋である土蔵の多層階化が一定以上の財力がある家に限って行われた、という可能性である。加えて、複数の建築物の棟札などに記されている大工の名前が同じであったことから、同一の大工、または家系や地域が同一の大工が好んで用いる工法の一つであったという可能性も考えられる。

## 4. 考察

### 4-1. 独立柱の役割に関する考察

独立柱を持つ三階蔵については、現存する三階蔵を対象とした調査で、兵庫県的小林家住宅(墨書によると明暦2(1656)年建築<sup>12)</sup>、岡山の井上家住宅(墨書によると宝暦3(1753)年<sup>13)</sup>、新潟の旧目黒家住宅中蔵(明治4(1871)年再建<sup>14)</sup>、和歌山のO家住宅(大正14(1925)年<sup>15)</sup>、滋賀県のN家住宅(江戸時代)の5棟を確認している。これらの蔵が独立柱を持つ要因としては、江戸時代中頃までに建てられた成立年代の古い土蔵であること、あるいは平面規模が大きいこと、積雪の多い地域にあることなどが考えられた。とりわけ、小林家とO家の三階蔵では、地棟を一本の材で用意することができなかつたのか、独立柱の頂部で2本の地棟を継いでいた。このことから、独立柱は地棟を支えるために用いざるを得なかつた材である、という可能性が浮上した。

今回取り上げた白峰地区の5棟の三階蔵は、内3棟が同じ所有者で、いずれも独立柱を持っている。1棟は桁行8間×4間と平面規模が大きく、梁行中央、地棟と平行に3本の独立柱が建てられている。桁行の8間という数字は三階蔵の中では最大値であ

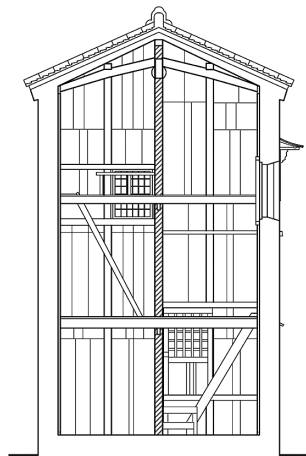


写真5 小林家住宅三階蔵の小屋組み  
独立柱の頂部に、2本の地棟を架けている

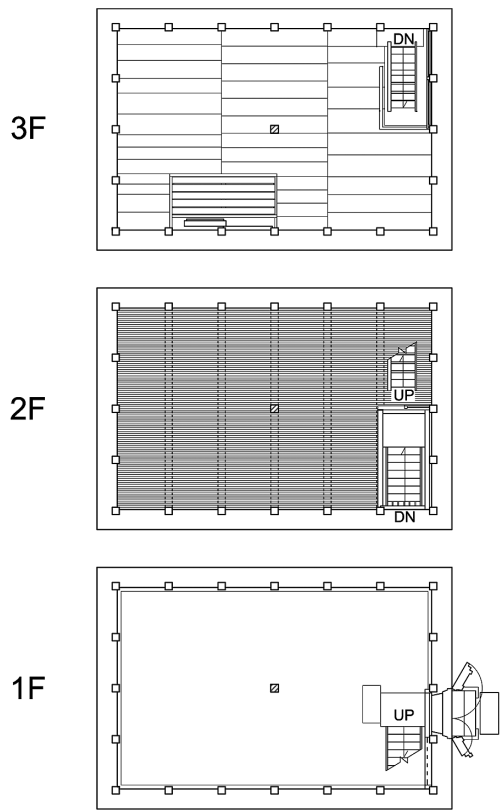


写真6 O家住宅三階蔵の小屋組み  
小林家住宅三階蔵同様、独立柱の頂部に、2本の地棟を架けている

る。平面規模が大きく、桁行の規模だけで見ても、同じ独立柱を持つ新潟の旧目黒家住宅中蔵の1.5倍、和歌山のO家住宅の2倍もある。一方、山岸家の残り2棟の蔵は、酒蔵(味噌蔵)が桁行3間×梁行2間、浜蔵が桁行4間×梁行3間と、いずれも平面の大きさで言えばごく一般的である。墨書から、米蔵・板蔵の建築に関わった大工と同じかあるいは同じ系統の大工によるものと考えられる。このことから、白峰では三階蔵の規模や地棟との関係とは別の役割のために、独立柱を建てていた可能性がある。



断面図



 独立柱

0 5 単位(m)

図12 小林家住宅三階蔵平面図および断面図

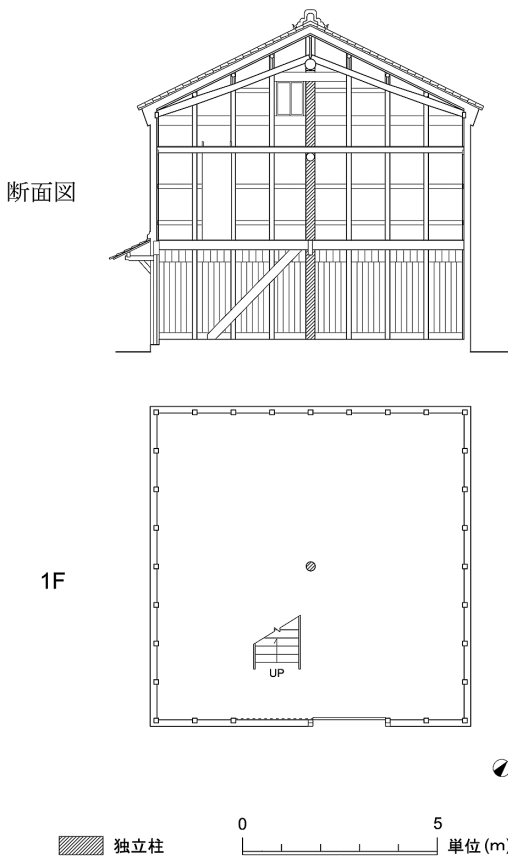


図13 O家住宅三階蔵平面図および断面図

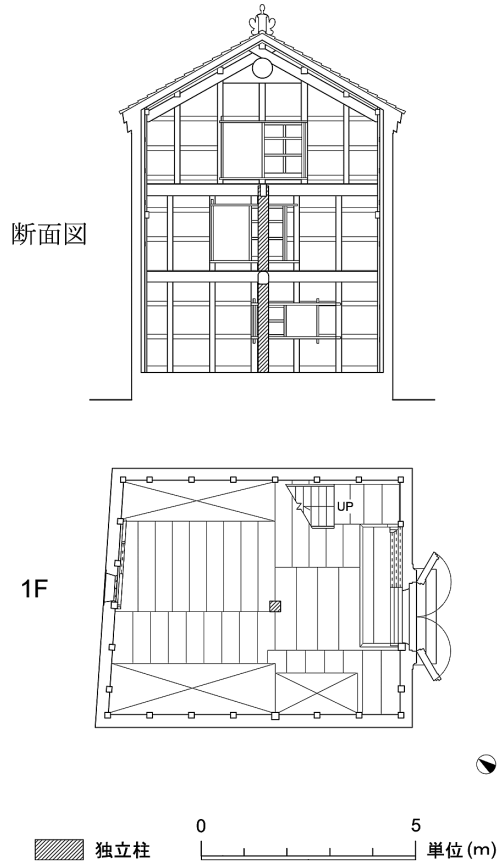


図14 N家住宅三階蔵平面図および断面図

#### 4-2. 独立柱をもつ土蔵の先行研究について

平山論文によれば、桁行と独立柱の相関関係は無いが梁行3間を超える土蔵と独立柱には相関関係があり、後者に関してはさらに階数との相関関係があるとしている<sup>16</sup>。

しかし、この論文で根拠とされている梁行5.5m・2階建ての旧笹川家住宅雑蔵や、梁行6.4m・平屋建ての同家米蔵、梁行5.5m・3階建ての旧目黒家新蔵にはいずれも独立柱がない。また、同論文では旧目黒家新蔵を「2階建て」としているが、この蔵は実際には3階建てである。同論文では独立柱と階数の相関性が高まるといった記述があることから、この事例が3階建てであることは、むしろ相関性を低くするものと言える。

新潟県内の国指定重要文化財となっている土蔵（1階～3階建て）では7割に独立柱があるとし、

梁行と階数が独立柱の使用率と関係していると述べているが、その根拠が不確かである。

また平山論文では、同じ敷地内とはいえ独立柱がすべてにあるわけではないことを根拠に「地域性」を否定している。しかし白峰地区に照らしてみれば、4-1. 独立柱の役割で述べたとおり、山岸家の板蔵・米蔵は梁行4間、浜蔵は3間、酒蔵（味噌蔵）は2間だが、いずれも独立柱がある。その地域で大工を生業としていた同一人物、ないし家系などを同一とする大工らによって、「独立柱の使用」という建築上の特徴が表された可能性は否定できない。

#### 4-3. 内部を仕切る三階蔵の例

白峰地区の三階蔵には、山岸家の米蔵・板蔵と松原酒店の味噌蔵・米蔵で内部を用途によって仕切る例が見られる。とりわけ松原酒店の味噌蔵・米蔵は



ただ仕切るだけでなく、米蔵部分は2階建て、味噌蔵部分のみ3階建てにしている。1-2階の階段はそれぞれに設けているが、3階への階段は米蔵の2階から味噌蔵の3階へと架けている。壁でしっかり仕切った上、階段もそれぞれの空間に備えておきながら、3階への動線だけがかなり特殊である。

そもそも、現存する三階蔵で内部空間を仕切る例はあまり見つかっていない。新潟県の石田家住宅三階蔵では、桁行中央部に壁を作り、内部を二部屋にしながら、行き来するための引き戸を設けている<sup>17</sup>。内壁には吊り棚を設け、階段は1-2階と2-3階でそれぞれの空間に分けて設置しており、あらかじめ収納や動線を考えて設計されたことが窺える。

土蔵とは元来、1階あたりを1つの空間とし、異なるものを収納する場合は長持ちなど個々を箱に入れて整理することが一般的であった。そういった意味では、土蔵の内部を仕切って異なる用途や機能を持たせたり、階段の付け方を工夫したりすることは、比較的新しい年代に建てられた土蔵の特徴の1つかもしれない。

#### 4-4. 独立柱と床組

松原酒店の土蔵は特殊な造りであると言える。桁行の3分の1が3階建てで、残りが2階建てとなっており、2階建ての部分には中央に柱が建っている。蔵全体の棟高は同じであることから、内部の階高だけが異なるようである。2階建ての米蔵には平面の中央に柱が建っているが、地棟までは届いておらず、また2階部分では位置をずらして建てられていることから、地棟を支える以外の理由で用いられた柱だと考えられる。

独立柱は「独立した棟持ち柱」として定義してきたが、中には棟持ち柱まで届いていないものもある。元は棟持ち柱であったものの、2階から3階へ増築する際に棟持ち柱でなくなったと考えられる事例が、滋賀県のN家住宅の三階蔵である。N家住宅の三階蔵は、矩形でない平面形式が特徴で、複数の側柱に増築される際に継いだと思われる継ぎ手や仕口が見られる。土蔵の中央部には独立柱が立っているが、その頂部は、3階の床板下わずか1センチほどの、床組までで止まっている。

土蔵における床組には、1間ごとに架けられる大引きに、床板の長手方向を桁行と平行の向きにして直接載せる方法や、中引き梁(桁行方向)の材



写真7 N家住宅三階蔵の2階天井(3階床組)  
独立柱に中引き梁と大引きが直交するように架けられ、その上に根太と床板が載っている。

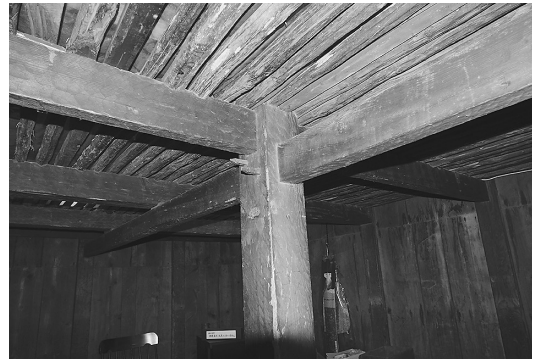


写真8 小林家住宅三階蔵の1階天井(2階床組)  
独立柱に中引き梁と大引きが直交するように架けられている。2階床に使用されているのは長く細い丸木で、大引きに渡すように桁行方向に架けられている。

を通し、その上に大引き(梁行方向)を載せ、場合によってはさらに大引きと直行方向に根太を載せ、桁行と直行方向の向きに床板を載せる方法などがある。前者の場合、梁行方向の長さに応じて必要な大引きの長さも変化する。

平面規模が大きい蔵、階数が多い蔵は多くの木材が必要である。それに合わせて大きく長い材を手に入れなければならないが、木材を組み合わせ、架け合わせることで、場合によっては大きな材でなくとも構築することができる。

N家住宅三階蔵を始め、独立柱を用いている蔵の多くは、中引き梁(桁行)、大引き(梁行)、根太を組み、その上に床板を載せている。この方法では、中央部に1本柱があることで、そこを一つの基点と

して材を架け、床組を強固なものにしたり、短い木材も材料として使用したりすることができる。独立柱には床組構造の一端を担う役割も付されているのではないだろうか。

地棟を支えることが独立柱の役割であるとするならば、N家住宅三階蔵の独立柱は側柱を継いだのと同様に、継ぐはずである。つまり、この蔵での独立柱の役割は地棟を支えることではなく、他にある。敢えて3階の床組付近まで独立柱を残した理由は、床組にこそあるのではないだろうか。

## 5. さいごに

平山論文では、国指定重要文化財となっている土蔵のうち、「梁行5.5m(3間)以上」で、尚且つ階数が増えるほど独立柱の使用率は上がるとしていた。また論文内で取り上げられている新潟県内の重要文化財となっている土蔵のうち、梁行3間以上で2階建ての土蔵はすべからず独立柱を持つとしている。しかし、報告されているリストの内、梁行3間で2階建てとされている旧目黒家住宅新蔵は実際には3階建てであり、独立柱も持たない。さらに梁行の距離が短いものでは最小4m(2間)でも独立柱を持ち、反対に梁行が3間以上で3階建てであっても独立柱を持たないものもある。

このことから、独立柱の有無を決定づける要因として、梁行3間以上であることと階数を基準に据えることは早計と言える。

そもそも、なぜ独立柱は必要なのか。土蔵自体の規模が、その土蔵が独立柱を持つ条件であると言い切ることができない以上、独立柱自体に課された具体的な役割を検討する必要がある。

独立柱が必要な理由には大きく分けて、①地棟を支えるため、②床板を支える材を架けるため、この2点が考えられる。

①の例としては、桁行方向に1本で架けられる地棟用の材木を用意することができなかったことが挙げられる。独立柱を持つ土蔵の中には、桁行のほぼ中央部で異なる地棟が独立柱上に架けられているものがある。典型的な例としては兵庫県の小林家住宅土蔵や和歌山県のO家住宅土蔵が挙げられる。

②の床板を支える材に関しては、梁行・桁行ともに規模が大きくなればなるほど、床板を並べる距離は長くなり、床面積は大きくなる。N家を始め、独立柱を用いる三階蔵では中引き梁、大引き、根太

と、材を重ねて床組を構成する傾向があり、床組の使用材や強度などとの相関関係がある可能性を示唆している。

以上より、独立柱が用いられる要因としては、単純に梁行の規模が条件になっているわけではなく、屋根構造や床組、資材入手の環境などの要因が関係していると考えられる。事例を集めることで、独立柱を用いる要因や、あるいは階数との関係についても更なる事実が見つかる可能性はある。引き続き、類例を調査するとともに考察を試みる。

## 註

- 1 平山育男「長岡市山古志東竹沢関家住宅土蔵 新潟県における土蔵の独立した棟持柱について」(『日本建築学会北陸支部研究報告集』第51号 pp.425-428、2008)
- 2 久保奈緒子「独立柱を持つ三階蔵について」(『2012年度日本建築学会関東支部研究報告集』2013年3月、日本建築学会)
- 3 石川県白山市教育委員会『白山市白峰 伝統的建造物群保存対策調査報告書』(2010年3月)
- 4 同 p.91
- 5 同 p.90
- 6 同 p.72
- 7 同 p.74
- 8 久保奈緒子『修士論文 三階蔵に関する基礎的研究』(2013年3月)
- 9 石川県白山市教育委員会『白山市白峰 伝統的建造物群保存対策調査報告書』(2010年3月 p.76)
- 10 同 p.77
- 11 同 p.68
- 12 多淵敏樹「『小林家土蔵』について 明暦2年に建った三階蔵」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』p.925、1990)
- 13 財団法人文化財建造物保存技術協会編『井上家住宅調査報告書』(倉敷市教育委員会、p.48、1998)
- 14 財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財旧目黒家住宅 中蔵 新蔵 修理工事報告書』(守門村、1983)
- 15 文化庁・文化遺産オンライン(<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/178656>)
- 16 平山育男「長岡市山古志東竹沢関家住宅土蔵 新潟県における土蔵の独立した棟持柱について」(『日

- 本建築学会北陸支部研究報告集』第51号 p.428、2008)
- 17 加茂市教育委員会「石田家住宅(土蔵)」(『歴史的建造物調査報告書』、p.1-4、株式会社グリーンシグマ、2005)

## Comment

濱崎 一 志

人間文化学部地域文化学科教授

建築の3要素を「用・強・美」としたのは古代ローマの建築家ヴィトルヴィウスである。建築に機能性、耐久性、芸術性を求めた言葉である。通常の二階建ての蔵はこの条件をよく満たしている。厚い壁と扉で大切なものを温湿度の変化の少ない環境で守る機能性と、半間置きに立つ柱と厚い壁による耐久性、漆喰塗りの壁や鍍絵に見る芸術性など枚挙にいとまがない。

ところが三階蔵になると少し話が違って来る。狭い階段を三階まで垂直移動することや、階段の配置にも法則性がなく動線が冗長であることなどから、機能的にできているとは言いがたい。高さが高いだけに重心も高く、さらに二階建ての蔵に三階を増築した蔵もあり、耐久性にも疑問がある。富の象徴とも言われてきただけに、屹立する立ち姿は芸術性をうかがわせるものの、施主の意向や大工の嗜好の影響を強く受けて建てられている。こうしたことから三階蔵を、「用・強・美」の視点から合理的に考察し、多様性に富む三階蔵から建築の意図を探るのには困難をとまなう。

また、二階建ての蔵を含め、蔵の研究が進んでいるとは言いがたい状況にある。蔵は平面形が極めて単純で通常は単室からなり、平面形からその変遷を

たどることは不可能である。開口部の位置、扉の形状、階段の位置と形状などの細部意匠を検証しながら、編年を試みたり、建築の意図や改築の意図を読み取るしかないのが現状である。

こうした中で、久保氏は三階蔵の独立柱に注目し、その特徴を明らかにしようとした。独立柱も解積の困難な蔵の構成要素である。独立柱は構造を支えるという意味では耐久性を担うが、山岸家住宅蔵や小林家住宅蔵のように、梁行2間の蔵に独立柱が立つと機能性は阻害される。N家住宅三階蔵のように梁行3間であり独立柱を設けるが、独立柱は2階までで、3階にはない。独立柱の必要性を否定するような架構である。こうした様々な事例を詳細に観察しながら導き出したのが、独立柱は屋根構造や床組み、資材入手状況などの要因に左右されるという結論である。

江戸時代前期から建てられ続けている三階蔵が長い年月の中で多様化しており、開口部や内装、屋根形状など様々な要素と組み合わせで考察し、三階蔵の持つ様々な特徴の分析や編年、その三階蔵の建築意図の探求を進めていくことが今後の大きな課題である。